

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]



児童福祉の現場を実習で体験

“子どもが好き”だけでは通用しない

●人間健康学部 4年次生
井尻 万裕 さん

社会福祉士の受験資格を取得するためには、福祉の現場での実習が必要となる。人間健康学部福祉と健康コースでは、社会福祉士を目指す学生は3年次で福祉関連の施設で実習を体験する。井尻万裕さんが選んだのは地元・堺市の児童福祉施設。彼女にとってその実習は、社会の現実に目を開かせ、そこで自分が何ができるかを考える貴重な体験となった。



▲女子ラクロス同好会の仲間たち。井尻さんはマネジャーとして選手を支えている

「人生で今が一番忙しいかもしれない。後悔しないように、どのようなことでも最後まで頑張りたい」。人間健康学部福祉と健康コースの4年次生になったばかりの井尻万裕さんは、そう語ると明るい笑顔を見せた。

社会福祉士の資格取得に向けた勉強、「子ども家庭福祉サービス論」を専門とする山縣文治教授のゼミでの研究や、女子ラクロス同好会マネジャーの仕事、そして就職活動。確かに彼女の毎日はやることがいっぱいだ。

社会福祉士資格取得のための勉強では、児童相談所で3週間、児童養護施設で10日間実習を経験し、子どもをただ優しく受け止めるだけでは通用しない現場の難しさを実感した。

「押し入れにこもって『嫌や!』と泣き叫ぶ子どもを、何とかなだめて、出したこともありました。子どもが好きだったので児童福祉関連の施設を希望したのに、『今日も子どもと一緒に』と家から出る時に気が重くなることも。施設の方も実習生には子どもを甘やかすだけでなく、叱る時にはちゃんと叱ることを学んでほしかったんだと思います」



山縣教授の研究室で、「シングルマザーの子育て支援」をテーマに研究を進めている

女子ラクロス同好会は、部員約70人を抱え、2013、2014年関西3位と健闘している。井尻さんは選手として入部したが、けがもあって、選手を支えるマネジャーを引き受けた。マネジャーの仕事は用具や飲み物の整理など裏方的なものだけではなく、コーチ、トレーナーの作った練習メニューを選手に遂行させるため、マネジャーもグラウンドを走り回る選手に向かって、大きな声で指示を出すなど、積極的に前に出て動かなければならないのが女子ラクロス同好会の伝統だ。

また、西日本にある学生ラクロスチームの代表者のミーティングにも参加。昨年11月から、安全対策部の代表に就任し、テーピングの仕方など安全対策を指導する講習で講義をしたり、大会では救護体制の管理も担当する。

実習に行く前は、社会福祉士の資格を取得して、そのまま福祉の道に進もうと考えていた井尻さんだったが、今は一般企業に就職し、社会人としての経験を積んだ上で、改めて福祉の道に進むかを考えようと、就職活動に取り組んでいる。

ゼミでの研究については、「出産と子育ては女性の人生を変える出来事ですが、皆が同じ環境で子育てできるわけではありません。そこで私はシングルマザーの子育て支援について、行政面での制度や、社会福祉施設の活用なども調べていきたい」と話す。「振り返るとここまでの学生生活はすごく濃い日々でした。私も少しは前向きに変わったかな、と思います」

子どもや女性、あるいはスポーツを楽しむ人を“支える”ことを学びながら、彼女は自分自身を成長させる確かな毎日を過ごしている。

井尻 万裕—いじりまゆ
■1994年滋賀県生まれ。比叡山高等学校卒業。人間健康学部4年次生。関西大学ラクロス同好会(女子)マネジャー。日本学生ラクロス連盟関西地区安全対策部代表。

自由な発想と遊び心の詰まったパロディー菓子を

30円、50円の駄菓子が生み出すお笑いパワー

●オリオン株式会社 常務取締役 企画本部長
高岡 五郎 さん —工学部 1977年卒業—

1948年、大手菓子メーカー出身の3人で創業した子供菓子専門メーカー、オリオン株式会社。以来、これまでに開発したパロディー菓子の数は1,000種以上にのぼり、大人をまねたい子供の心をくすぐり、大人のほおをも緩ませ続けている。その魅力の源にあるのは、企画本部長の高岡五郎さんをはじめ、従業員の自由な発想と関西ならではの遊び心だ。

高岡 五郎—たかおか ごろう
■オリオン株式会社常務取締役、企画本部長。1954(昭和29)年大阪生まれ。77年関西大学工学部応用科学科卒。同年、オリオン株式会社に入社し、すぐに企画などで手腕を発揮する。97年より現職。

駄菓子屋に並ぶ濃紺の箱「ココアシガレット」。子供の頃、中に入った棒状のラムネ菓子がたばこをふかすまねをして遊んだ人は多いのではないだろうか。生みの親は大阪・十三の子供菓子専門メーカー、オリオン。創業して間もない1951年にたばこの「Peace」を模したココアシガレットを発売しヒット。ピーク時には年間約1,800万個、今でも約400万個の売り上げを誇る。他にも、ライター型ケースに入った粒ミント「ウメミンツ」や、缶飲料風の容器に入ったラムネ菓子「ミニコーラ」など、子供達の心をわしづかみにしたロングセラー商品を発売し続ける一方で、携帯電話を型どった「CoDoMo」や、有名市販薬をもじった「ピラフェロモン」、「正論丸」など、時代を反映した商品を次々と世に送り出している。

こうしたパロディー菓子のアイデアは、本社会議...ではなく、会議後の居酒屋会議で生まれると言う。「お酒が入って、ノリや勢いで出てきた案がいいんですよ。そして、いいなと思ったらとにかく発売してみる(笑)」。そう語るのは、インスタントカメラを模した「食ベルンですHi」など、数多くのヒット商品を手掛ける企画本部長の高岡五郎さん。商品開発で忘れてはならないのは、創業当初から変わらない



「オリオンの4C」だという。「4Cとはダイヤモンドの品質を評価する国際基準で、カラー、クラリティ、カラット、カットの頭文字「C」から来ています。それにちなんで、オリオンの4Cは『見て楽しい、もらって嬉しい、食べておいしい、また欲しい』。会社ロゴにあるトレードマークのフォーン(星)もこれを象徴しており、そこへ従業員の魂(たましい)の「C」が加わることで、5つ星のお菓子が誕生するのです」。

高岡さんのアイデアマンとしての片りんは、学生時代の話からもうかがえる。深夜ラジオの「仁鶴・頭のマッサージ」などが好きで、毎週出されるお題に応じてネタを考えては応募。採用されることも多かったそうだ。応用化学科の研究室では、研究と称して春は千里山へ箒振り、夏は海水浴場で磯遊び、秋には銀杏拾いに興じた。「例えば、銀杏の皮は水酸化ナトリウムを用いると、綺麗に溶かすことが出来るのではないかと議論したり。学んだ知識を身近なことに生かせないかいつも考えていました」。当時の仲間とは、卒業後も欠かすことなく忘年会を開いて集まり、その友情が一番の自慢だと笑う。



▲大学時代の友人たちと

現在、オリオンは淀川警察署からの依頼による街頭犯罪防止を促すキャッチフレーズ入りラムネ菓子や、歯科医と共同で考案したタブレット菓子、有名音楽グループやシンガーソングライターからの要望によるCDジャケットなどのパロディー菓子も手掛けている。「これまでは市場に無い物を新商品として発売してきましたが、これからはこういう物を作りたいと依頼された商品を形にしていきたい。それを実現できることが私の喜びであり、使命だと思っています」。



▲15種のお菓子が入った「おかしぼこ」は小学校でおなじみの道具箱がモチーフ